

追悼

宮地政司先生を悼む

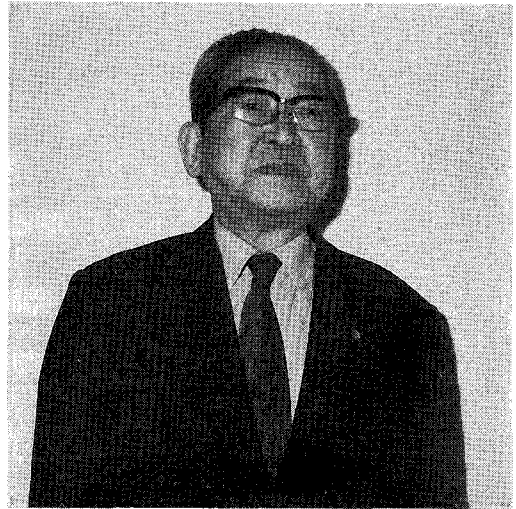
弔詞

宮地政司先生は、10月11日享年84歳で永眠されました。日本の天文学・測地学・宇宙科学の開拓・発達につくされた先生の偉業を思えば、誠に大事な人を失ったものと悲しみにたえません。

先生は、広島県の御出身で、大正14年3月東京帝国大学理学部天文学科を卒業され、直ちに東京帝国大学助手兼東京天文台技手として勤務につかれました。その後、昭和38年3月東京大学を停年退官されるまで、38年間にわたって東京天文台において、経緯度の決定、天文時・標準時の責任者として、その業務と研究に専念されました。昭和2年からは、文部省測地学委員会技師として東京天文台構内にあった国際報時所へも勤務され、これが東京天文台と合併されるまで、東京天文台技手も併任されていました。昭和24年、東京天文台に研究部門制が導入された際、東京天文台としてはじめての専任教授に補され、天文時部門を担当されました。さらに、昭和32年4月より停年までの6年間、東京天文台長の一助を務められました。

日本天文学会には、昭和4年から16年の間に、庶務・会計・編集理事を担当されて、学会活動の礎を築かれ、戦後昭和22年より2期4年間副理事長、昭和28年より2年間理事長また、昭和45年まで十数年にわたって評議員を務められ、日本天文学会の発展に多大の貢献をなされました。日本天文学会として惜しんでも余りある先達でありました。

先生の研究活動は、「天文時・標準時の精密決定」とそれに引き続く「経度変化と極運動の関係についての研究」と要約できるでしょうか。当時の振り時計から水晶時計への転換や写真天頂筒のいち早い導入を通じて、日本の精密な時体系の確立につくされました。そして、無線電信によって欧米との時刻比較の精度を向上させるため、無線報時信号の電離層伝播について研究され、伝播時間に関する「宮地の式」を導かれました。これは、極めて精度のよい式で国際的な高い評価を得たものです。同時に、電離層の研究という新しい研究分野の開拓へ、先駆的な役割りを果たされました。この精密な時刻比較から正確な経度の測定をされ、それまで緯度の観測からしか検出されないと考えられていた極運動の影響を、経度変化でも検出できることを世界に先がけて実証されま



した。今日では、経度・緯度双方の観測が極運動の研究に使われており、先生の45年前の研究がしっかりと根づいていることがわかります。

他方先生は、日本学術会議会員、測地審議会会長や宇宙開発審議会・気象審議会・運輸技術審議会等の委員を歴任され、日本の科学技術行政の立案・施策に参画されてきました。特に、先生自身の研究と密着した国際無線報時事業の確立、黎明期にあった日本の宇宙開発事業・南極観測事業の計画策定と積極的な推進に大きな力をつくされました。測地審議会では、地震予知体制整備の建議のまとめ役として活躍されたことはよく知られています。

以上のように、先生がこれまで手掛けてこられた幅広い仕事は、先生の見識・大きな度量・意見をまとめてゆく指導力があってこそなされ得たものであり、私共のとても及ばぬところであります。しかしながら、先生の切り拓いてこられた様々な分野に、多くの若い人達も育ち花開きつつあります。私共は、それらをより一層大きく発展するよう努功する所存であります。

先生とのお別れに際し、日本天文学会を代表し、謹んで先生の御冥福をお祈りいたします。

日本天文学会理事長

早川幸男